

## <論文> 「文化集団」の回想

著者	本多 秋五
雑誌名	日本文学誌要
巻	36
ページ	5-10
発行年	1987-03-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019483">http://hdl.handle.net/10114/00019483</a>

## 「文化集団」の回想

本 多 秋 五

「文化集団」は原稿を載せてもらったこともあり、まるで無関係な雑誌でもなかったのだが、その成立事情、編集の意図、編集の中心になった人たちの経歴など、私にはよくわかっていなかった。今も実はよく知らない。

私の手もとは、この雑誌の第四号以後は大体そろってあるが、創刊号から第三号までがない。その最初の三号を私は見たこともない。その理由が私にはわからない。

昭和八年は文芸雑誌が簇出した年とされているが、簇出したといっても現在の洪水的な出版界とはわけがちがう。「文学界」「行動」「文芸」などの創刊は、文学青年なら誰でも知っていた。「文化集団」は左翼の文芸雑誌で、広告もあまりしなかっただろうが、それにしてプロレタリア文芸雑誌が新しく創刊されて、それを私が三ヵ月間も気づかずにいたということが不可解である。

そのとき私は娑婆にいなかったのだろうかとも思ったが、そうではなかった。私は昭和八年一月二三日、新嘗祭の日につかまって、

昭和九年四月一日に娑婆に出てきた。今ある第四号の昭和八年九月号と一〇月号と十一月号とは、私がつかまる以前に買ったもので、この雑誌の創刊当時には私はたしかに娑婆にいたのである。

私が留置所にいた間に出た雑誌は、郷里に帰ってから、東京にいた平野謙にたのんで送ってもらったものにちがいない。それから以後の雑誌は、名古屋や岡崎へ出たときに買った覚えがある。

変なことにこだわるようだが、なぜ私はこの雑誌の出現に三ヵ月間も気づかなかつたのだろうと、その点に腕をつかんで引き止められる思いがある。

一つには、私が当時プロレタリア科学同盟にいて、神田今川小路の「江戸ビル」にあった事務所にも近寄れないような半非合法の仕事に駆けまわっていて、作家同盟の内部の雰囲気がどんなものであるかを、ぜんぜん知らなかったということがあろう。編集発行署名人の秀島武雄も、見たことのある名前と思うだけで、どんな人か知らなかった。長谷川進は、名前さえ記憶になかった。

もう一つには、目次に並んだ名前があまりに雑多で、こういう雑多な顔ぶれを並べた商業雑誌の形が、プロレタリア文学雑誌としてありうるということが、私に理解できなかったためではないか。つまり私は「文化集団」を、プロレタリア文学系の作家や批評家にも書かせた素姓怪しい通俗雑誌と思ったのではなかったかと思う。

理由はまだ外にもあったかも知れない。「プロ科」での駆けまわりが忙しくて、文学関係の友人と会って話す機会がなかったという事情もあったかも知れない。それにしても、当時は少し前の「戦旗」系の文学者と「文戦」系の文学者とは氷炭相容れぬものとして、互いに反撥し合っていたように、正統は純粹なものであり、ごちゃ混ぜは素姓怪しいもの、通俗世界のものという考え方があり、私がほとんど完全にそういう考え方の支配下にあったことは事実である。

昭森社から出ていた「本の手帖」が『プロレタリア文芸雑誌』特集（一九六七年二月）を載せたとき、長谷川進が『文化集団』とその頃の思い出』を書いた。それによると、作家同盟指導部のやり方に不満のあった長谷川進は出版部長を辞し、秀島武雄は組織部長を辞し、黒島伝治、伊藤貞輔の二人と相談して「文化集団」の発行に踏み切ったと書いている。

当時は、作家同盟員の文筆上の活動に対しては、右翼的偏向がきびしく糾弾され、それに多少の理解を示したものも調停派として叩かれた時代である。そういう時代に、作家同盟を脱退してならともかく、また、片隅の仕事である同人雑誌を出すならともかく、作家同盟の同盟員としてどまりながら営業的な文芸雑誌を発刊することが、作家同盟の内部ではどのように受取られていたのだろうか。

高見順は「文化集団」に載せた『文芸時評』（昭和九年一月）のなかで、荒木魏、新田潤などは作家同盟の中央集権制のもとで、機関誌に作品を発表する機会がなく、不当に虐待されていた。「その不当をなくする為、私などは当時、同人雑誌の独立を認めてくれる様、幾度中央部に頼んだか分からぬが、いつも否定され、発表の自由を奪はれてゐた。」と書いている。

少し前まではそういう状態であつたらしいのに、「文化集団」には鹿地亘、山田清三郎、江口渙、中條百合子など、作家同盟の中央指導部の人たちが寄稿していて、決して非友誼的ではない。

「文化集団」が創刊されたのは、小林多喜二が虐殺されたあとのことである。そして、創刊のその月には佐野学、鍋山貞親らのいわゆる「巨頭転向」事件が起っている。もうそのころは作家同盟の統制はきかなくなって、各人自由の行動がそこまで容認される情勢になつていたのである。そして、時がたつとともに、機関誌に書くのには威儀を正して書かねばならぬ。そうでなくても「プロレタリア文学」は毎号発禁で氣息えんえんとしている。「文化集団」なら比較的気楽に発言できる、というところから作家同盟員の寄稿がふえたのだろうか。

私が「文化集団」を読んだのは、前に書いたような事情から、主として昭和九年四月に郷里へ帰ってからのことであつた。

一番印象に残っているのは、やはり社会主義リアリズムのいち早い紹介と、その後の社会主義リアリズムをめぐる論議である。小説では、平田小六の『囚はれた大地』がトルストイに似た作風で、親

愛感をもった。

社会主義リアリズムの問題は、「文化集団」の終刊後も等閑視できない問題として、それに関係のある論文を読んでいたのだが、結局わからなかった。およその輪郭がわかったと思えたのは、戦後も一五年以上もたって、一九六二年に『久保栄と社会主義リアリズム』を書いたときであった。そのとき、社会主義リアリズムの問題は自分にはわからなかったが、他の誰にもよくはわかっていなかったことがわかった。

社会主義リアリズムという創作スローガンは、当時のソ連の現実に立脚したものであった。第一次五ヶ年計画の成功が確かなものになって、社会主義建設の前途が明るく見えはじめたソ連の現実に根差したものであった。共産党の存在にすら合法性がなく、小林多喜二の虐殺と共産党の「巨頭転向」に予兆されていたように、それからますます暗い時代に沈みこんで行こうとする日本に、そのまま輸入して適用することの不可能なものであった。ドイツにおいても事情はおなじだっただろう。

社会主義リアリズムという合言葉は、ソ連において、プロレタリア作家と非プロレタリア作家との差別を撤廃して、ひとしくソ連作家として待遇して行こうとする、文学団体の改組に際して掲げられた合言葉である。それは、ソ連にあっては、改組された全国単一の作家団体の存在とともに、第二次大戦がはじまって、ドイツ軍の侵入を迎えたときには、有効に作用しただろう。しかし、その反面では、それはスターリン主義強化の具にも化しつつあったはずである。

ソ連内の非プロレタリア作家にとっては、プロレタリア作家と非プロレタリア作家との差別が撤廃されることは、解放を意味しただろう。しかし、それはより大きな政治の網に新しく包みこまれることでもあった。ドイツ軍の侵入を迎えた「大祖国戦争」によって、その網が強く引き絞られたのは自然の勢いで、スターリンひとりのせいではなかっただろうが、それがまたスターリンへの絶対奉仕の情性を養ったにちがいない。

社会主義リアリズムの「方法」では、スターリンがこの世にあるかぎり、スターリン主義を批判することができなかった。どんなに正しくその弊害を指摘しても、それは「歴史を発展的に見る」社会主義リアリズムに引く者と弾ぜられただろう。

社会主義リアリズムの提唱には、「創作方法における唯物弁証法」という合言葉があまりに一般的且つ抽象的で、創作方法としては役に立たぬからこれを廃棄する、という意味があった。それが日本のプロレタリア作家の間で社会主義リアリズムが点を稼いだ理由の大半であったと思える。

「創作方法における唯物弁証法のための闘争」という合言葉には、世界観と方法との混同があるといわれた。この両者の間にはギャップがあり、エンゲルスのハークネスあての手紙に指摘されているように、そこに矛盾があってもバルザックの偉大を傷つけない、といった場合すらあるといわれた。

ところで、そこにいう「世界観」とは何か。その実質は、資本主義社会は崩壊して社会主義社会が実現する、ブルジョアは没落してプロレタリアが支配する社会が到来するという歴史観である。それ

はマルクス主義者の基本的常識である。そんなもので小説や戯曲や詩の書けるはずがない。古い合言葉が無効を宣告されたことはいいことであった。では、社会主義リアリズムは何であったか。

当時——昭和九年八月に開かれた第一回全連邦ソヴェト作家大会が決定した作家同盟の規約を見ると、その前文に、

「社会主義的（当時は社会主義的と訳した—筆者）リアリズムは、芸術創造に対して、創造的イニシアチブの顕現、並びに多様な形式、スタイルおよびジャンルの選択の特殊な可能性を保証している。」（ナウカ社版『第一回全ソ作家大会報告』、傍点は筆者）

とある。規約にはないが、社会主義リアリズムは革命的ロマン主義を包含する、とも当時いわれた。

してみると、社会主義リアリズムは、あらゆる形式、あらゆるスタイルにおける創造的イニシアチブの顕現を容認するもののようなのである。しかし、「特殊な可能性」という、その「特殊な」が意味不明瞭で、凄くもある。この「特殊な」は、おなじ規約前文のこれより先にある、左の文章に結びつく含意をもつようである。

「文学運動とソヴェト政権の政策の重要諸問題との（ここに、を入れて読むとわかりやすい—筆者）緊密にして直接的な連繫と、作家を社会主義建設の積極的な活動に包含すること、更に……とが、文学、その芸術的技術、その思想的・政治的充実性および実践的動力の決定的条件である。」

わかりにくい文章で、微妙な心配りも窺われるが、割切っていえば、作家が一般的に社会主義建設に寄与することが必要であるばかりでなく、ときによってはソ連の党および政府の重要政策と直接に結びつき、それを自らの課題とすることが「決定的」に重要である、というのがその大意だろう。

これが社会主義リアリズムの基礎条件、大前提である。ところで、この大前提の上に立つかぎり、何をどう書いてもいい、というのだとすれば、この政治優位の原則こそ社会主義リアリズムそのものだということになる。そこには何も特定の創作方法はないのである。

これは今から見れば、いぶん極端な政治主義的な文学論のようだが、当時の日本のプロレタリア文学は、これと兄たりがたく弟たりがたいほど政治主義的な文学論を奉じていたから、その点については百も承知、二百も合点で、何の異存もなかったが、さて、創作方法は？とあたりを見まわして、それがどこにも見当らないのではたと当惑し、ついにそこから浮かび上ることのない混乱におちいった。

戦後になって、伊藤整は小説の方法を語るのに「芸」の概念を導入して、思う存分に論議をすすめた。ソ連の文学論によって初めて「創作方法」なる言葉を知り、世界観の側に片寄せた「創作方法」論以外を知らなかった左翼の文芸理論家は、「芸」の概念に目潰しを食って、そこに一指を触れることもできなかった。

伊藤整は小説の方法についての二冊の充実した書物を著した後、その結語ともいべきものとして、「私個人としては、作者の資質、体験を最も効果的に生かせるような工風を見出すことが、小説述作の根本である。」（『いやな感じ』、昭和三八・九・九、「日本読書新聞」と書いた。最高の理論的到達点のようでもあり、誰もが経験的に直観していることのもうようでもあった。）

ソ連で社会主義リアリズムの方法が提唱され、それを日本でどのように受止めるべきかが論議されていたころ、あれはソ連においてのみ有効なもので、日本にはあてはめる地盤がない、日本では「匍匐前進の批判的リアリズム」をこそ採用すべきだ、という議論があってもよさそうなものであったと思える。

しかし、日本のプロレタリア文学は、そういう発想を生むには伝統的に高姿勢でありすぎたし、批判の高さと匍匐の低さとを結びつける理論を生むにはまだまだ未成熟であった。

ついでにいえば、魯迅が死の直前に書いた『徐懋庸に答え、併せて抗日統一戦線の問題について』には、この「批判の高さ」と「匍匐の低さ」とを結びつける視点があるように思える。魯迅は中国文芸家協会の掲げる「国防文学」のスローガンに対して「民族革命戦争の大衆文学」という考えを擁護した。「大衆文学」は、日本ではいう娯楽専門の「大衆文学」とは少し意味がちがうだろう。魯迅は作家の向背を問題にしたので、作品を問題にしたのではなかった。だから、この論文は直接「創作方法」の論議と重なるわけではないが、その背後には、「高さ」と「低さ」とを結合し、統一する視点が仄見えるように思う。私も必要文献をすべて見ているわけではないので、魯迅研究者の教えを乞いたい。ただし、「民族革命戦争の大衆文学」は、いかにもギクシャクして、スローガンとしては一目瞭然性を欠くと思う。

作家同盟末期の苦悶は、他にも理由があったが、一つには文化団体「補助組織」論に起因していると思われる。

かりに共産党が万人の党員をもち、「全協」が十万人の組合員を擁していたとしたら、文化団体「補助組織」論も多分そんなに無理がなかっただろう。「基本組織」が非合法下にあり、ひと握りの勢力しかもたないところで、作家同盟は「補助組織」と規定され、自らも進んでその規定を承認したため、本来は党や「全協」がやるべき仕事まで背負いこみ、作家同盟のメンバーは、事実上、職業革命家のみがよく堪えうる重荷に悲鳴をあげたのであった。

「文化集団」は、社会主義リアリズム論を紹介し、それをめぐる論議を載せたことで、私には第一に記憶されるが、その他にも、林房雄の作家同盟は分裂して、雑誌中心のいくつかのプロレタリア作家団をつくるべしという『一つの提案』と、それに対する反響を載せ、また、『ナルプ解体の声明』と、それに対する反響を載せたことも記憶される。

林房雄の『提案』に対する反響かどうかかわからないが、『提案』を機会に発表された伊藤貞助の『プロレタリア文学の再認識』や、作家同盟解体の反響の一つである上原清三（神山茂夫）の『左翼』作家への抗議などは、発表当時にはその重要性が理解できなかったが、今読むとプロレタリア文学運動の根幹にメスを入れて、大変興味深いものである。

「文化集団」は、作家同盟の末期の症状を公然の誌面に浮び上らせたものとして、もっとも貴重とされるのではあるまいか。

最後に、私がこの雑誌に原稿を載せてもらったことがあるというのは、『森鷗外論』（昭和九年七・八月連載）と『奉天一巡記』（昭

和九年(一月)のことである。

『森鷗外論』は、昭和八年の秋、私がかままる前に書いて、たしか根津のあたりであったと思う神崎清の家で、明治文学談話会の人たちの集まりで朗読したことがあった。昭和九年四月、留置所を出てきて、郷里へ帰るまでの間に山室静に会って、どこか発表できる場所があったら発表してほしい、と頼んでおいたのが、案外早く「文化集団」に掲載されたのであった。

掲載されたのを見ると、「exactな学問といふことを性命にして」の「性命」が「生命」に、「始終何物かに策うたれ」の「策」がわざわざ「むち」とルビがふつてあるのに「答」に、「日の要求」の「日」が「目」に変わっていた。「策」が「答」に変わったのは誤植ではない。「日の要求」が「目の要求」に変わったのは、誤植かも知れないが、こんな誤植を見落すのがおかしい。ここの編集部には、学問はないが、勇気だけは十分にもった人がいる、と思った。

しかし、この論文は卒業論文を書直したもので、この雑誌の誌面にはあまり向かないものであった。「文化集団」も末期に近いころのこと、執筆者を「文学評論」の方へ吸い寄せられて原稿難だったから、半ば埋め草として載せてくれたのだったろう。

『奉天一巡記』は、その年の夏、長兄のお伴で当時の「満州国」を旅行した見聞記を、『森鷗外論』でつながりのできたこの雑誌に送ったのであった。署名は『森鷗外論』の方は高瀬太郎、『奉天一巡記』は北川静雄である。

詳しいことは忘れたが、『奉天一巡記』では、「亡国の民となるなかれ、敗戦の国となるなかれ」という意味の文章を削られた。戦う以上、勝たねばならぬ、という帝国主義的な意味で削られたのか、同善堂という見るからに欺瞞的な慈善施設を見たことなどを書いたから、「満州国」人に対する同情を憚る意味で削られたのか、私としては本当にそう感じた実感のある言葉であっただけに不本意だったが、削られそうな箇所を削られたと思った。念のために書くのだが、当時の削除や伏字は、大部分、編集者の裁量によるものであった。

(八六・五・一八)

これは復刻版「文化集団」(久山社、八六年六月)の別巻に寄せたものだが、久山社の許諾をえて、ここに載せてもらうことにしたものである。